研究活動についての解説

本多啓

2010年4月3日版

1 総論

1.1 認知科学としての言語研究

本多の研究は認知言語学によっている。認知言語学は人間の言語知識の構造・機能を、言語に固有でない知識の一般的な構造・機能の中に埋め込まれたものと想定して明らかにしようとする、認知科学の一分野である。本多の研究は、とくに、人間の認知すなわち人間の心の働きを開放系と捉え、その開放系としての側面が具体的にどのように言語現象に現れているかを明らかにしていくという方向性を持っている。

人間の認知を開放系と捉えるということは、認知を個人の頭の中に閉ざされたものとしてではなく、環境の中に埋め込まれ、環境に対して開かれたものと捉えるということである。ここで言う環境とは、物理的環境と社会的環境の両面を含む。

認知が物理的な環境に対して開かれているということは、認知が身体を介して物理的な環境と絶えざる相互作用を続けており、それが認知の構造・機能を作り上げる上で必須の役割を果たしているということである。さらに言うならば、認知が身体を「介して」環境と相互作用しているというよりは、認知は身体的な過程そのものであり、それは環境を構成する一側面であるということでもある。

一方、認知が社会的な環境に対して開かれているということは、個人の持つ知識としての認知の構造・機能が他者との相互作用の中で作り上げられているということである。そ

のようなかたちで、認知は社会的な環境の中に埋め込まれ、社会的な環境を構成する一側面として成立する。

社会は、ヒトとヒトが相互に「理解」(= さまざまな程度の誤解) しあうことによって成立する。人が他人の心をどのように「理解」しているか、あるいは自分とは異なる他人にとっての環境の意味をどのように「理解」するか、という他者理解の問題も、認知の重要な側面である。

そして、物理的な環境の一側面としての認知と、社会的な環境の一側面としての認知は、相互に独立して成立・存在するものではない。両者は共同注意というプロセスによって相互に関連づけられ、相互に規定しあう関係にある。

このような認知観に基づき、人間の認知のあり方がいかに人間の言語能力を規定し、それがどのような形で具体的な言語構造に現れているかを明らかにすることが、本多の研究の究極の課題である。本多の個々の研究はそのような認知科学的な問題意識を前提とした文脈の中に位置づけられることによって、はじめてその意味合いが理解されるものである。

1.2 学際性

以上述べたように、認知科学的な問題意識に基づき、人間の知識の一般的な構造・機能との関連で言語知識の構造・機能を明らかにするためには、知識の一般的な構造・機能についての信頼できる知見を踏まえることが必須となる。そこで認知言語学の研究は、関連諸分野の知見を積極的に導入した、学際的な性質を帯びたものとなる。

このように見ると、認知言語学の実践には三つのレベルがありうることが分かる。第一は、言語現象の説明において他分野の知見あるいは「認知の原理」を援用する際に、言語研究における有効性があらかじめ示されている知見ないし「原理」に依拠するというレベルである。この場合には、その有効性を示した言語研究がすでに存在するわけであるから、関連諸分野の研究を自ら渉猟して参照する必要はない。第二は、これまでの言語研究では注目されてこなかった知見の有効性を示す、というレベルである。この場合には、言語研究ではその知見は取り上げられていないわけであるから、自ら言語学以外の分野の研究を参照することが必要となる。第三は、言語現象を説明する「認知の原理」を既存の認知科

学の研究成果によらずに（すなわち独立の根拠によらずに思弁的に）措定してそれに依拠する（場合によってはその原理の妥当性の検証を心理学等に期待する）というレベルである。

本多の研究はこのうちの第一と第二のレベルに当たるものであるが、その特色をなすのは第二のレベルに当たる面である。以下、これについて述べる。

認知の身体性、あるいは身体的なプロセスとしての認知という捉え方に基づいた研究を積極的に進めている学問分野の代表として、生態心理学がある。本多の研究は生態心理学の知見に多くを負っている。また最近では、生態心理学と関連を持ちつつ、それと隣接した現象を扱う研究としての原因帰属理論との接点を模索しており、そのため社会心理学の知見も導入するに至っている。

一方、認知の社会性、あるいは社会的なプロセスとしての認知という側面に関しては、言語行為を相互行為としてとらえる会話分析などの考え方を導入している。

両者をつなぐ共同注意に関しては、発達心理学・比較認知科学の知見を参照している。他者理解に関しては、「心の理論」「シミュレーション」が鍵概念になる。

1.3 言語研究としての認知言語学

上記のような学際的な問題意識を持つ一方で、言語知識の研究としての認知言語学は、実際の言語事実との接点を常に持ち続けなければならない。したがって、言語事実に関して蓄積されてきた知見、およびそのような事実に対する見方としての言語理論（あるいは、事実を構成するものとしての言語理論）に対する目配りが必要であるということは、あらためて言うまでもないことである。

1.4 本多の研究のあり方とその意義

本多の研究は観察された言語事実に対して、それを説明できる原理としての認知のプロセスを提示し、それぞれの言語事実に対して「なぜそうようになるのか」に対する可能な解答を提案するものである。

言語事実を説明する認知的な原理としては、本多以前にすでに認知言語学を導入され、一

定の有効性が示されているものが含まれることは言うまでもない。これは先に述べた第一のレベルに相当する。しかしながら、既存の認知言語学の道具立てのみを採用して現象をその枠に無理に押し込めることは、言語と認知の仕組みに対する理解をゆがめることにつながる。また、先に第三のレベルとして述べたような、独立の根拠づけを欠く「原理」を措定してそれに依存するというやり方も、危険をはらむ。

本多の研究の中心は、上に第二のレベルとして述べたように、認知科学の諸分野を独自に渉猟することにより、一定の独立した根拠をもつ道具立てを見出し、それを言語事実の説明原理として提案することにある。

本多が導入する認知の道具立ては、それぞれの分野では広く知られたものである。生態心理学で提唱されているアフォーダンス、社会心理学で扱われる原因帰属、発達心理学や比較認知科学で取り上げられる共同注意や心の理論などは、心理学のそれぞれの分野では常識に属するものと言える。他方、本多が説明の対象とする言語事実も、言語学の世界ではよく知られているものが多い。本多の研究においては、新しい言語事実の発見といえるものは決して多くはない。その意味で本多の研究は、周知のものと周知のものとの橋渡しをするものであり、この点でオリジナリティに欠ける印象を与えるかもしれない。

しかしながら、そのような研究であっても、あるいはそのような研究であればこそ、オリジナリティを発揮するという面がある。このことについて、本多 (1997b, 2002a, 2005a) を例にして述べる。これらの論考では、英語の中間構文を生態心理学で提唱されているアフォーダンス概念に基づいて分析している。英語の中間構文についてはそれまで言語学の立場からさまざま特性が指摘されてきた。本多の論考が説明の対象としている事実のほとんどは、そのような先行研究により、言語学者の間では周知の事実となっていたものである。他方、すでに述べたように、アフォーダンスの概念は心理学者の間では、(賛成するかしないかの立場の違いはあるにせよ) 周知の概念であった。

しかしながら、中間構文の研究者、あるいは広く言語学者全般を見ても、中間構文にまつわる諸事実がアフォーダンス概念を導入することで統一的に説明できると想定した人はいなかったと思われる。その一方で、アフォーダンス概念についてみれば、この概念が中

間構文という文法現象を説明する上で有効であると想像した人は、生態心理学者、あるいは広く心理学者全般をみても、いなかったと思われる。

同様のことは共同注意に関しても言えることである。

すなわち、本多の研究は、言語事実を見る上での、それまでなかった「見方」を提示するものであり、他方で認知科学的な概念の、それまで考えられていなかった適用可能性を示すものである。また、事実に対する新たな見方を提示することは、事実と事実の間の、それまで見出されたことのなかった「つながり」を見出すことにもつながる。これが本多の研究の、言語学、およびそれを含む認知科学に対する、貢献と言えよう。

2 各論

以上の解説を踏まえて、以下、本多の個々の研究を位置づける。位置づけは総論の枠組みに従い、認知の身体性・認知の社会性の2分類による。両者を媒介する位置にある共同注意については認知の社会性の議論に含める。

2.1 認知の身体性—アフォーダンス、原因帰属—

生態心理学 (アフォーダンス論) を導入した本多の研究は Honda (1994a), 本多 (1994), Honda (1994b) に始まり、Honda (1995), 本多 (1997a, 1997b, 2002a, 2002b, 2003a, 2003c, 2004a, 2004b, 2005b, 2005c), 本多・後安・坂本 (2003) を経て、本多 (2005a) においていちおうの集大成を見た。

その後の研究は本多 (2005a) に対する修正・発展と位置づけられる。

アフォーダンス論によって説明することができる言語現象として中間構文があるが、これは可能表現に含められる。そこから可能表現全般に対する研究の可能性が生じる。これについて、本多 (2005a) で萌芽的な形で言及した <能力可能> <状況可能> の区別との関連で展開したのが本多 (2006b) である。さらにこの論文で暗示的に言及した原因帰属概念を本格的に可能表現に適用したのが本多 (2008a) であり、それは社会心理学における学説史を踏まえた本多 (2009b, 2009d) において、いちおうの確立を見た。

他方、アフォーダンス概念それ自体と言語の関係について考察を進めた議論として本多

(2008b) がある。

2.2 認知の社会性—間主観性・共同注意—

認知の社会性を踏まえた本多の研究は、言語行為を相互行為と捉えた本多 (2001) に始まり、本多 (2003b) においては共同注意と文法現象の関連へと議論を進めた。これらの議論は通常の認知意味論研究で暗黙のうちに採用されている方法論としての方法論的独在論を自覚的に克服するという方向性を持つ。両論文は改訂・再構成を経て本多 (2005a) に取り込まれている。

その後の研究はやはり、本多 (2005a) からの修正・発展と位置づけられる。

本多 (2006a) は言語によるコミュニケーションを共同注意のプロセスと捉え、これに基づいて認知意味論の諸概念を語用論的な現象に適用する可能性を提示した。ここで提示した枠組みで日本語の助詞タリを分析したのが本多 (2007a) である。

また本多 (2007b) は、他者にとってのアフォーダンスの知覚という現象と言語コミュニケーションの関連を議論し、本多 (2005a) で提示したコミュニケーション論の欠陥を克服する可能性を示した。

本多 (2009a) の発表の場となったシンポジウムは、本多 (2008c) の書評対象書籍の著者たちとの共催であった。そこでこの論考は、同書評で認知意味論研究の独在論的傾向を指摘・批判したことを受けての、間主観性についての自身の見解をまとめる(オトシマエの)機会とした。

本多 (2009c) は、本多 (2005a) で未完成な形で言及した他者理解の問題について修正・発展させたものである。

3 評価およびその後の展開

3.1 本多 (2005a) についての評価

本多 (2005a) を取り上げた書評としては、『英文学研究』第 83 巻 (日本英文学会、2006 年 11 月、定延利之氏による)、『英語青年』(2005 年 7 月号、谷口一美氏による)、『言語』(2005 年、野村益寛氏による)、『語用論研究』第 7 号 (日本語用論学会、2005 年、李在

鎬氏による)がある。

同書は、2005年度に第39回の市河賞を受賞した。

また、哲学者の河野哲也氏による評価が次のURLにある。

http://www.jinbunkai.com/entry/bun_news_yo.php?info;d=48

(pdfで をクリックするとリンク先に飛びます。)

もっとも最近では、野村(2009)で、本多が採用している分析の方法論についての評価と位置づけがなされている。

2009年11月の日本言語学会第139回大会では、本多(2002a, 2005a)などを踏まえたワークショップ「知覚の言語学に向けて: 行為と知覚の関係はどう言語化されるか?」が行われ、本多もこれにコメンテータとして参加した。コメントの内容は「言語研究において知覚を考えることの意味合い」「知覚に関する二つのモデルの位置づけ」「各発表の、ワークショップの中での位置づけ」「個別発表の研究へのお願い」であった。

3.2 その他、英語学・言語学関係

Honda(1994b)で提唱した、日本語と英語のなる的・する的事態把握という相違が生態心理学の自己知覚論によって原理的に説明が可能であるという議論は、池上嘉彦氏によって「主観的把握」「客観的把握」という区別として展開され、現在に至っている。またこの議論と、共同注意についての本多の議論は、若干の変容を受けながら、日本語教育にも取り込まれている。その成果が池上・守屋(2009)として刊行されている。そこには本多自身が執筆したコラム(本多(2009e, 2009f, 2009g))も収録されている。

共同注意が言語学的な意味論に持つ意味合いを概観したものとして、本多(2010)が刊行予定となっている。これは、本多(2003b)、本多他(2003)、本多(2005a, 2009e, 2009f)に基づきつつ、補足を加えたものである。

また、共同注意と自由直接話法による引用との関連が、大久保(2010)によって指摘されている。

英語の中間構文に対するアフォーダンス論による説明は、坂本真樹氏らに影響を与えている。その内容は坂本 (2002, 2003), Sakamoto (2008) に提示されている。

本多 (2009a, 2009b, 2009d) は主催者からの招聘による発表である。

本多 (1994) には、中国語訳がある。

3.3 その他の分野

共同注意についての本多の議論が心理学の文献で引用された事例として、田中 (2004) がある。

また 2004 年度以来、日本生態心理学会の学会誌『生態心理学研究』の編集委員に名を連ね、生態心理学に関心を持つ言語学者に対する論文投稿の慫慂や、投稿された論文の審査などを行っている。ちなみに本多他 (2003) は認知言語学者と生態心理学者の共同プロジェクトである。

参考文献

Honda, Akira (1994a) “An Inquiry into the Semantics of Motion, Location and Viewing,” *Linguistic Research* 12, 23–67, Tokyo University English Linguistics Association.

Honda, Akira (1994b) *Linguistic Manifestations of Spatial Perception*. Doctoral Dissertation, Department of English Language and Literature, University of Tokyo.

Honda, Akira (1995) “Notes on Subjective Motion,” *Linguistic Research* 13, 29–51, Tokyo University English Linguistics Association.

Sakamoto, Maki (2008) “Middle and Tough constructions in Web advertising,” 『日本認知言語学会論文集』 8, 86–96.

池上嘉彦・守屋三千代 編 (2009) 『「自然な日本語」を教えるために — 認知言語学をふまえて —』, ひつじ書房, 東京.

- 大久保加奈子 (2010) 「引用表現と引用者の態度 — 政治家の選挙演説を例に —」. 第 25 回社会言語科学会研究大会口頭発表 (『社会言語科学会第 25 回大会発表論文集』 pp. 106-109).
- 坂本真樹 (2002) 「英語の Tough 構文への生態心理学的アプローチ」. 『日本認知言語学会論文集』 2, 12-22.
- 坂本真樹 (2003) 「生態学的知覚論、心の理論、属性描写文の認知意味論」. 山梨正明ほか 編, 『認知言語学論考 No. 2』, , ひつじ書房, 東京.
- 田中みどり (2004) 「共同注意と言語」. 大藪泰, 田中みどり, ・伊藤英夫 編, 『共同注意の発達と臨床: 人間化の原点の究明』, 163-186, 川島書店, 東京.
- 野村益寛 (2009) 「意味論探究の行方 — 認知意味論からの展望」. 『言語』, (2009 年 12 月号).
- 本多啓 (1994) 「見えない自分、言えない自分: 言語にあらわれた自己知覚」. 『現代思想』 22-13, 168-177, (1994 年 11 月号).
- 本多啓 (1997a) 「世界の知覚と自己知覚」. 『英語青年』 142-12, 658-660, (1997 年 3 月号).
- 本多啓 (1997b) 「英語の主体移動表現、中間構文、知覚動詞について—生態心理学の観点から—」. 『駿河台大学論叢』 15, 95-116.
- 本多啓 (2001) 「文構築の相互行為性と文法化」. 山梨正明ほか 編, 『認知言語学論考 No. 1』, 143-183, ひつじ書房, 東京.
- 本多啓 (2002a) 「英語中間構文とその周辺—生態心理学の観点から—」. 西村義樹 編, 『認知言語学 1: 事象構造』, 11-36, 東京大学出版会, 東京, (シリーズ言語科学 2).

- 本多啓 (2002b) 「認知言語学と生態心理学: なぜ生態心理学なのか」. 日本認知言語学会第3回全国大会ワークショップ: 「生態心理学的視点に基づく認知論的言語研究の可能性」における口頭発表。
- 本多啓 (2003a) 「英語の中間構文」. 『言語』 32-4, 76-81, (2003年4月号).
- 本多啓 (2003b) 「共同注意の統語論」. 山梨正明ほか 編, 『認知言語学論考 No. 2』, 199-229, ひつじ書房, 東京.
- 本多啓 (2003c) 「認知意味論における概念化の主体の位置づけについて」. 日本認知言語学会第4回大会発表 (*Conference Handbook* 75-78).
- 本多啓 (2004a) 「自己の直接知覚としての Subjective Construal」. 日本認知言語学会第5回記念大会 シンポジウム 「Subjective Construal とは何か」における発表 (*Conference Handbook* 192 - 195).
- 本多啓 (2004b) 「認知意味論における概念化の主体の位置づけについて」. 『日本認知言語学会論文集』 4, 129-139.
- 本多啓 (2005a) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』, 東京大学出版会, 東京.
- 本多啓 (2005b) 「生態心理学から見た言語の意味 — とくに自己知覚に着目して —」. 『生態心理学研究』 2, 1-12, (日本生態心理学会).
- 本多啓 (2005c) 「自己の直接知覚としての Subjective Construal」. 『日本認知言語学会論文集』 5, 515-530.
- 本多啓 (2006a) 「認知意味論、コミュニケーション、共同注意 — 捉え方(理解)の意味論から見せ方(提示)の意味論へ —」. 『語用論研究』 8, 1-13, 日本語用論学会.

- 本多啓 (2006b) 「助動詞の Can の多義構造 — <能力可能> と <状況可能> の観点から」. 『英語青年』 152-7, 426-428, (2006 年 10 月号).
- 本多啓 (2007a) 「副助詞タリの用法」. 『駿河台大学論叢』 33, 1-18.
- 本多啓 (2007b) 「他者にとっての環境の意味の知覚についての覚書」. 『神戸外大論叢』 58-6, 31-47.
- 本多啓 (2008a) 「現代日本語における無標識の可能表現について」. 高木拓明・宇野良子 編, 『動的システムの情報論 (7) — 自然言語のダイナミズム —』, 81-90, 統計数理研究所, 東京.
- 本多啓 (2008b) 「動く身体と空間表現 — 生態心理学からのアプローチ —」. 『言語』 37-7, 44 - 51, (2008 年 7 月号).
- 本多啓 (2008c) 「書評: 『ことば・空間・身体』」. 『言語』 37-10, 117, (2008 年 10 月号).
- 本多啓 (2009a) 「言語に現れた主観性と間主観性 — 生態心理学の観点から —」. 『人工知能学会第 2 種研究会 ことば工学研究会資料 SIG-LSE-A803: ことば工学研究会 (第 31 回) [シンポジウム] 主観性とパースペクティヴ』 (人工知能学会) pp. 41-50, (<http://subjective.exblog.jp//http://ultimavi.arc.net.my/banana/Workshop/Programs/31.html>).
- 本多啓 (2009b) 「日本語の無標識可能表現と英語の中間構文」. 関西言語学会第 34 回大会 (2009 年 6 月 6 日) 口頭発表.
- 本多啓 (2009c) 「他者理解における「内」と「外」」. 坪本篤朗, 早瀬尚子, 和田尚明 編, 『「内」と「外」の言語学』, 395-422, 開拓社, 東京.

本多啓 (2009d) 「日本語の無標識可能表現について — 原因帰属理論の観点から —」. 国際シンポジウム「認知言語学の拓く日本語・日本語教育の研究と展望」(北京大学)における口頭発表 (2009年10月18日).

本多啓 (2009e) 「コラム 無助詞」. 池上・守屋 (2009: 129-130).

本多啓 (2009f) 「コラム 共同注意と配慮」. 池上・守屋 (2009: 170-171).

本多啓 (2009g) 「「カリンちゃんと傘」の英語訳から見えてくるもの」. 池上・守屋 (2009: 177-182).

本多啓 (2010) 「共同注意と間主観性」. 『主観性と主体性』(『ひつじ 現代の意味論講座 — 新しい意味研究の地平』第5巻).

本多啓・後安美紀・坂本真樹 (2003) 「生態心理学的視点に基づく認知論的言語研究の可能性」. 『日本認知言語学会論文集』 3, 347-358.

目次

1	総論	1
1.1	認知科学としての言語研究	1
1.2	学際性	2
1.3	言語研究としての認知言語学	3
1.4	本多の研究のあり方とその意義	3
2	各論	5
2.1	認知の身体性—アフォーダンス、原因帰属—	5
2.2	認知の社会性—間主観性・共同注意—	6
3	評価およびその後の展開	6
3.1	本多 (2005a) についての評価	6
3.2	その他、英語学・言語学関係	7
3.3	その他の分野	8
	参考文献	8